慶念 ―子どもの幸せを願って―

慶念は、江戸時代の末期から明治の初めにかけて、涌谷町に住み、命の尊さを唱え続けた僧です。小太りのがっちりした体格で、うれしいときは大きな鼻をひくひくさせながら満面に笑みをうかべて喜びました。ぜいたくをきらい、貧しい身なりをしていたので、「ほいと坊主」と呼ばれていました。僧侶でありながらに、寺に住まず各地を転々としていました。食べ物も粗末なものを好んで食べ、飢えをしのげればよいと考えていました。着物をあたえようとする人があっても、

「もったいない、もったいない。」

とお礼を言うだけで受け取りませんでした。

いつも時間があれば説法をするために歩き回っていました。

田んぼで草取りをしている人がいれば、

「わたしの手伝った分だけ休んで、わたしの話を聞いてくれ。」

と言って、草取りを手伝い、農夫たちを前にして説法をしました。

慶念は、小さな命を大事に考えていました。畑を作るために、山地の草を焼くときは、

「ごめんなされ。ごめんなされ。」

と、額を地面にすりつけて、焼かれる虫にしきりにあやまったといわれています。

慶念は、子どもが好きでした。あるとき、子どもたちが出来川で魚とりをして遊んでいました。慶念は、子どもたちが道ばたに投げ捨てた小さな魚の前にかがみこみ、一匹一匹拾って川に返してやりました。しかし、子どもたちをしかることはありませんでした。

説法…仏教の教えを聞かせること。

慶念は、山口村（現在の岩手県北上市）の羽黒山一帯の山を管理する裕福な家の次男として生まれ、名前を長兵衛といいました。成長した長兵衛は、兄とともに木材を売るなど仕事にはげんでいました。

江戸時代の末期は、天候不順や洪水などの大災害が何度も起きました。冷夏と害虫の発生により、田畑は大きな被害を受けました。そのため、農作物の収かくが激減し、飢えに苦しむ人や病気にかかる人が増えました。食べるものがなく、命を落とす人も少なくありませんでした。天明（一七八二年）の大飢饉のころは、赤ん坊が生まれても育てることができず、泣く泣く手放す者もあらわれました。赤ん坊の亡きがらが、川に投げ捨てられるというひどい話もあったようです。苦しみに耐えかねて、打ちこわしや一揆を起こす民衆も増えました。心を痛めた長兵衛は、念仏を唱える集会に参加するようになりました。しかし、心は満たされませんでした。長兵衛は、自分ができることは何かと毎日悩むようになりました。そして、とうとう決心しました。

「家を出て僧になろう。仏の道を説くことで皆を救いたい。尊い命を救いたい。」

周囲は反対しましたが、長兵衛は仙台に出て僧となり、名前を「慶念」と改めました。その後、西国（西日本）へ向かい数年間修行を重ね、涌谷の地にたどりつきました。

慶念は、毎日毎日、朝から晩までひたすら村々を巡り歩き、人々に命の大切さを説きました。赤ん坊を手放そうとする家があることを知ると、思いとどまらせようと、自ら訪ねていきました。

「人が人であるための正しい道がどうしてわからぬか。」

と声をからし、顔を真っ赤にして教え歩きました。

しかし、そんな慶念の努力を踏みにじるように、ひそかに赤ん坊を手放してしまう家もありました。

赤ん坊が生まれたと聞いてその家を訪ねてみると、すでに赤ん坊はいませんでした。帰り道、慶念は体中から力がぬけ、道ばたにひざまずいてしまいました。胸がしめつけられるように痛みました。心の底からわき上がる悲しくやるせない感情を押さえることができず、目の前の小川に張った分厚い氷を割ろうと拳を振り上げました。

天明の大飢饉…江戸三大飢饉のひとつ。日本各地で餓死者を多数出した。

打ちこわし…ふつうの人たちが金持ちや役所などをおそうこと。

一揆…農民が支配者を武器をもっておそうこと。

が、すんでのところで思いとどまりました。氷の下で何かが動いたのです。よく見ると、一寸ほどの小魚でした。慶念は、四つんばいになり、懸命に生きる小魚たちをしばらく見つめていました。

やがて、慶念は足下の根雪を両手ですくい、ごしごしと顔をこすりました。慶念がすくった雪の下から、細い草の芽がのぞいていました。慶念は、小魚たちに微笑み、細い草の根にそっと触れ、天を仰ぎ大きく深呼吸をしました。

隣村に、善助とおとよという夫婦がいました。大変貧しく、二人で生きていくのがやっとでした。その夫婦に赤ん坊が生まれると聞いた慶念は、心配になって善助とおとよのもとに走りました。

慶念は荒い息を整えながら、畑に出ている善助に声をかけました。

「善助さん、もうすぐ生まれるなあ。」

善助は、ゆっくりと振り向きましたが、慶念だとわかると激しくうろたえて視線をそらしました。

慶念は、静かに言いました。

「善助さん、おとよさんと相談してほしい。赤ん坊を育てられないのなら、わたしがもらって育てたい。」

赤ん坊が生まれたのは、翌朝でした。

善助は、布切れに大事そうに赤ん坊をくるんで、

「男の子です。どうか、どうかお願いします。」

と言って慶念に手渡しました。そのとき、家の中からおとよの泣きさけぶ声が聞こえました。善助も、肩をふるわせていました。

慶念は、肩をふるわせる善助と小さな赤ん坊を抱きしめました。

「この子は、わたしが大切に育てます。ありがとう、ありがとう。」

と言いました。そして、大きな鼻をひくひくさせながら、赤ん坊ににっこりと語りかけました。

「名前をつけなければのう。わたしの新しい道の始まりだ。そうだ、『はじめ』がいい。どうだ、『はじめ』。よい名

一寸…約三センチメートル。

がついたぞ。うんうん。」

慶念は、赤ん坊の小さな桃色のほっぺに自分のほっぺをくっつけました。そして、しばらく赤ん坊のほほの温かさを感じていました。

赤ん坊を背中におんぶして、お乳をもらえる農婦を訪ね歩く毎日が続きました。また、命を落とす赤ん坊がいないかと、山野を歩き回りました。さらに、説法を唱え歩くことも忘れませんでした。寺でお経を唱える坊主ではなく、自ら野を巡り、赤ん坊を育てながら雨の日も風の日も説法を続ける姿は、やがて多くの人々に「生きる」希望をあたえるようになりました。慶念のもとには、一人また一人と赤ん坊が預けられました。慶念の信者によって阿弥陀堂が建てられましたが、この阿弥陀堂には、常に、二、三人の赤ん坊と四、五人の幼子がいたそうです。男手一つで赤ん坊を育てることはたやすいことではありません。しかし、慶念に迷いはありませんでした。寝る間もおしんで赤ん坊に飲ませるお乳をもらい歩き、幼子の食べ物や着物をそろえるためにあちこち走り回りました。赤ん坊がいない家で、ほしいという家があれば、慶念のもとで育てた赤ん坊を預けました。一度は手放した家でも、やはり引き取りたいと願いがあれば、喜んで赤ん坊をもどしました。ひとえに、子どもがすこやかに生き続けることだけを願っていたのです。

慶念は、五十二歳の生涯を閉じるまでの間に、五十三人もの赤ん坊の命を、救い育てたといわれています。

慶念

慶念は、文政三（一八二〇）年に山口村（現在の岩手県北上市）に生まれた。天災や飢饉により暮らしが苦しく、赤ん坊を手放そうとする人々から、赤ん坊をもらい受け、五十三人もの赤ん坊の命を救い育てた。慶念は、この世に生きるものすべての命の尊さを身をもって示し続けた。

阿弥陀堂…仏様をまつった建物。